

わたしの シロ

シロが いません。

赤ちゃんの ときから、ずっと いっしよに くらしていた シロが いま
せん。

わたしが よぶと、すぐに こたえる シロが いません。

けさの 地しんで、こわれた 家から やつとの ことで はい出た わた
し。

「シロー。シロー。」

名前を よんでも、へんじを してくれません。

自分で 外へ 出たのかな。

どこかへ にげたのかな。

ひなんしよに むかう 間も、お父さんや お母さんと いっしよに、

「シロー。シロー。」

と よんで みましたが、シロは こたえません。

夜に なっても、つぎの 日の 朝に なっても、また、その つぎの 日
になっても、シロが いません。

五日目の 朝、みんなで こわれた 家の かたづけを しました。

こわれた げんかんの くつばこの 下に、白い ものが 見えました。

「シロだ。」

お父さんも お母さんも わたしも、ぐったり している シロを、いっし

ようけんめい たすけようと しましたが、はしらや かべが おもすぎます。

「シロー。」

きんじよの 人や、通りかかった きゅうじよたいの 人たちも てつだつて くれました。

シロは、たすかりました。

わたしは、けがを している シロを ぎゅっと だきました。

シロは、「クーン、クーン。」と なきながら からだを すりよせて きます。

わたしの なみだは、止まりませんでした。

見ていた 人は、はく手を して いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。